文学集・33

日本プロレタリア文学集・33

ルポルタージュ集 1

ロレタリア文学集・33

ホルタージュ集 1

日本プロレタリア文学集・33
ルポルタージュ集 (一)
定価 二八〇〇円
一九八八年九月三十日 初版©
発行者 山本 功
発行所 株式会社 新日本出版社
〒151 東京都渋谷区千駄ケ谷四の二五の六
電話 (〇三) 四二三一八四〇一 (営業)
(〇三) 四二三一九三二三 (編集)
振替 東京 三一一三六八一
印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN 4-406-01668-6 C0395

第三十八回配本

日本プロレタリア文学集・33

ルポルタージュ集 (一)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

宮嶋資夫
職業病……七
労働者の傷害……一一
麻生久
日立鉱山事件入獄記……一七
天川佐吉郎
小作人の生活……四九

里村欣三
富川町から（立ン坊物語）……五五
細井和喜蔵
女工哀史……六九
藤森成吉
狼へ！（わが労働）……二九五
佐倉啄二
製糸女工虐待史……三七五
解説……今崎暁巳……四九三
発表年月日と掲載文献……五一一

宮嶋資夫

職業病

東京衛生試験所附属の衛生参考館には、吾々の見て以て参考とすべき物の多くが陳列されている。

館内の階上階下に隈なく掛け連ねた、通俗衛生心得の絵解きには、悪疫、流行病等に罹る人は、安い魚を喰う人、汚い家に住む人、不潔な水を使う人達ばかりであると巧みに教えている。

階上第十一室には、謂ゆる職業病に冒されたる労働者の病所の局部、若しくは全身の一部が、模型によって示されている。

先ず第一の箱には肺臓が沢山並べてある。最初に置かれた健全な人の肺は、芙蓉の花片のように快い淡紅色を呈しているのが、次に並べた煙草職工の肺は、全体が薄黄色くなって、所々に小さな黒い汚点が出来ている。之れは長い間吸い込んだ、煙草の屑や塵埃の為めである事は、何人も一見して了解するところであろう。

石工の肺は、薄黒い霜降りだった。銅鉄工夫の肺には、鼠地の霜降りもあれば、全体が暗紫色に変ったものもある。ウルトマン（顔料）製造工の肺が、濃い浅黄色となっているのには、見るからに重苦しい感じを与えられる。若し夫れ炭山坑夫の石炭のように黒くなった肺の如きは、到底人間の身体の一器官とは思えない位であった。

凡て夫れ等の肺も、曾つては健全な人の肺が示すように、鮮やかな血が流れては巧みに伸縮していたに違いない。が、こうなった所を見ると、銅や鉄や石の粉や、さては煙草の埃などが一杯にぎっしり詰って、一分だって伸びも縮みもしないようにしか見えない。

次の箱に移ると、そこには、痛風結節にかかった洗濯業者の手があった。一体にうす青くむくんでいて、然かもその指の関節は、薄紫色をして不格構に腫れていた。凍傷にかかった園丁の指の節は、豚の肪のような色をして、丸く大きく膨れていた。

化学職工の石炭酸に因れる壊疽は、指先が焦げたように真黒くなって、その下の皮の厚く剝けた所からは、赤い肉が痛々しげに現われて、黒と赤の段だらになっていた。

アルコール湿疹に冒された、ペンキ職工の皮膚は赤紫にむくんで、小さな黒点がぽつぽつ出来ていた。鉛中毒者の歯齦は黒く縁取ったようになって、ぐらぐらにゆるんだ歯の不快さと、じくじく出て来る膿の悪臭を充分に思わせていた。

脾脱疽にかかった屠殺業者の、黄味がかって紫色に腫れた腕は、稍々透通って見えはしないかと思う程張り切っていた。その皮膚の表には疣のように黒く縁どって、頭の赤く剝けた腫物が、一面にうじゃうじゃ並んでいる。

座瘡に冒された晒職工の顔は真に生気なく蒼ざめて、赤い小いさな腫物が妙な色彩りを見せている。然かも此の気の毒な職工は、座瘡の為に眼も全然つぶれていた。

燐中毒の為に下顎を失った職工の咽喉は、崩れて丸で形を失っていた。何の事はない、腸を抉り出された蟇の腹を開いたように、滅茶滅茶に爛れて肉が流れて了たので、咽喉の内壁はゴムの剝けた喞筒管のような段だらが現われている。

之等の模型は、明治四十三年に独逸ドレスデンの博覧会に出品された物を、日本から出した物と交換したのだそうだ。然し此処に記した職業の凡てが、既に古くから日本でも経営されている以上、必ずや此の種の職業病もそこここにあるに違いない。

そして尚茲に、最も注意して記憶しなければならない事は、職業病の凡ては慢性なる事である。何人も知れる如く、慢性病はその初めに当って遽かに病状を呈さず、そして体内に深く喰い込んだ病毒が稍々表面に現れて来る頃には、もう全癒の見込は無いのである。由是観之、多くの労働者は、日々病毒に侵されつつある事も心附かずに、僅かな金の為めに、命を縮めて労力の切売をしているのだ。

僕は更に、労働者の職業病に冒される数、及びその病質をも知りたかったので、試験所に某博士を訪ねた。然し博士の言に依れば、日本には未だ衛生統計などと云う文明的な物の無いは勿論、それについて政府当局者は些の注意をも払っていないとの事であった。

そこで転じて、稍々此方面の統計に通じて居るという某氏を訪ねた。某氏の言に依れば、現在日本で最も多くの労働者を有する工業と云えば、繊維業即ち紡績、生糸、織物の五十万、製鉄の十五六万、別に鉱物業の約二十五万だが、此の内の坑外作業員九万は、鉄工に属すべき者だと云っている。其他の職工となると、至って数が落ちるので現在ではまだ統計をとる迄に手が附けられていない。

で第一の繊維業者の職業病と云えば、糸屑を吸い込む結

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

果起る呼吸器病である。が之れも工場の設備の整った外国では、職業病として認められない程少数であるが、日本では第一に工場が不完全であり、次に寄宿舎の設備の不整頓の結果、実に驚くべき程多数の労働者を年々斃死せしめている。

日本の紡績工場の不完全は勿論であるが、最もよき伝染病の媒介者となるはその寄宿舎である。無茶苦茶に長い時間働いて疲れた職工の身体を養う食物は、実に粗悪を極め、而して夜の寝具に至っては、一人に一組を与うる寄宿舎は皆無と云って好い。尠くも一組に二三人、多きは一組に六七人の職工を雑魚寝させる。加之、これ等の寝具には誰彼の区別無く、昨夜甲の組の寝た蒲団に今夜は乙の組が寝る。おまけにその出入が烈しいから、一人病毒のある者があれば、到る所に毒菌をまき散らして伝染せしめるのである。之れが為に繊維業職工の死亡率は一般国民の千分の三に対する千分の八以上の高位を示している。現に五十万の職工中一年の死亡者は約五千人であるそうだ。

鉄工は職業病と云っては別にないが、然し傷害の数は非常に多い。その傷害統計は商工局で調査しているが、兎に角塵埃、濛気の息苦しい程立ち籠めて居る工場内に働く者にして、職業病と云う程特殊にならない迄も、身体を害せぬ筈無きは自明の理である。

十六万余の坑内従業者、即ち坑夫、掘工等は、洞窟中の暗黒の為に貧血し、鉱脈母岩の繰粉、カンテラの油煙、爆発薬の毒煙を吸入するが為に、入坑後数年にして肺の弾力を失うに至り従って結核は容易に伝染せられる。よし結核に冒されない迄も、坑内作業に十四五年も従事すれば、よろけ即ち坑夫病となるを免れない。斯くて日夜黒い痰を吐き、身体は苧蛻のように血の気が失せて、遂に仆れて了うのである。故に坑夫の職業生命は、長くも二十年を出でないのが相場である。

従業員の数は余り多くないが、職業病として最も顕著悪性なのは、燐寸職工の燐中毒である。燐寸の種類は黄燐燐寸、硫化燐々寸、安全燐寸等であるが、此の中では前二者が最も中毒が烈しい為に、二三年前に、欧羅巴の中十ヵ国程が協議して、黄燐、硫化燐々寸の製造禁止を決議したが、日本は遂に此の決議に加わらなかった。

職工の作業にも調合、端塗、乾燥、箱詰、等の別はあるが、之れ亦前二者の害毒が最も甚だしい。調合端塗等に従事して、二三年乃至四五年を経過すれば、先ず歯齦炎を起して来る。斯くて歯が漸次脱落し初めた頃には、腐蝕は下顎骨に深く喰入って、遂には下顎骨全体が腐れ落ちて了う

のである。下顎骨が無くなって、それこそホントに飯を喰う事の出来なくなった人間の余命は、大抵知れているではないか。

大阪病院の外科室には、燐中毒に冒された人の腐れ落ちた下顎骨が、大きな壜に保存してある。現在の燐寸従業員の数も殆んど知れていないが、燐寸製造業開始以来、如何に多くの燐中毒者を出したかは、此の壜詰の腐骨によって証明される。

労働者の傷害

日本の労働者が一年間に何の位傷害を蒙るか、その傷害統計を調べて、それに依って職業によって異なる傷害状態を説明して見たいと云う希望を僕は持っていた。

で、此如統計表の当然調製されてあるべき農商務省に行って見たが、此所には、明治三十六年の調査に係る極めて不完全な、職工災害調査表一部を有する計りであった。

年々地方官庁から、職工の災害数を本庁へ報告すべき規定とはなっているが、今日では殆んど履行されていない。将来工場法が施行されて、監督官庁でも出来たら、悉しく判るようになるだろう。と農商務省の官吏は極めて呑気な事を言っている。

海外で一の同胞が災害を被っただけでも、大義名分の戦争を起す事がある。政府は此如人民の命を重んじているのだそうである。然し内地に於て、日々幾千の労働者が、傷害を被り、生命を衰いつつあるかの数すらも知らない者が、人民の命を重んずるなどと言える筈のものではない。

文句を言って見た所で、判らない災害数は矢張り判らない。そこで僕は止むを得ず、明治三十六年の災害調査表と、大正三年の農商務省統計の中から、二三の事項を茲に抄出して見る事とした。

先ず第一に僕の目についたのは、日本の鉱産額である。千九百十三年中に於ける鉱産総計は、一億六千三百五十七万四千九百五十五円である。

が、然し、茲で一寸注意しなければならない事は、此の調査が正確か否かと言う事である。経営者が、自家の鉱産額を届け出す時、税の負担を減ずる為めに、二三割は内輪に見積ると云う事は容易に想像さるる事である。

けれ共今は先ず此の調査表に従って、解剖に取りかかる。

次に鉱山就業員の数を見ると、二十六万五千三百九十一人と記されている。

鉱山就業員、即ち坑夫の賃金は、本番（日給の事）五十銭以上一円迄、一等、二等、三等の階級がある。一等坑夫の数の尠く、三等坑夫の数の多い事は勿論である。が、今之れを平均七十銭と見積ると次のようになる。

二十六万五千三百九十一人の一日取高十八万五千七百七十三円七十銭、一年間の就業日数三百三十日と見積れば、六千百三十万五千三百二十一円である。

鉱産総額一億六千三百余万円から就業員の賃金六千百余万円、及び鉱産総額の三割と見積った経費四千九百万円余を差引けば、残額五千三百万円は、直接生産に従事せざる、所謂資本家側の純益なる事が判明する。

五千三百万円は二十六万の坑夫に対し、一人一年二百円に当る。即ち坑夫は、食うや食わずの生活を為しつつ、生命を賭し、危険を冒す生産に従って、年々二百円を資本家に献納しつつあるのである。

更に鉱山変災調査を見るに、

一千九百十二年度

変災回数	三一、〇三〇回
死者	九八九人
重傷者	二、四一六人
軽傷者	二八、三三一人
合計	三一、七三六人

一千九百十三年度

変災回数	一三四、四五五回
死者	七三〇人
重傷者	九八九人
軽傷者	一三三、七九三人
合計	一三五、五一二人

而してその傷害の状は、鉱山に在っては、ダイナマイトに依って蒙る数、最も多く、負傷者千四百七十三人、死者十七人、落磐に依って負傷する者、千三百六十四人、死者百三十二人、其他窒息する者百二人、捲揚坑道、坑車、或いは捲揚台昇降の際等に傷害を蒙る者が之れに続く。

鉱山に於ける負傷者の状態は、実に悽惨を極めている。落磐の為めの傷害とは、作業中或いは坑道通過の際、突然落下し来たる岩石に打たれた者を言うのである。小さな岩であれば少々の軽傷で済むが、少し大きくなれば手足を踏み砕き、脳味噌臓腑を圧し潰される位は珍らしくない。脳を砕かれた者、顔面の半ばを剝きとられた者、腕をへし折られた者は、僕が鉱山にいた頃にも幾度か見るを得た事実である。

炭山に在っては、窒息の数最も多く、三万〇七百九十一人、其他瓦斯爆発、落磐、坑車等である。

即ち此の表に依って見ると、一千九百十三年度には、全国鉱山就業者の過半は傷害を被っている。

而して、此の死者、負傷者に対して、資本家の支出する

金額は、死者には本番百日分、即ち五十円乃至百円、其他弔慰金、葬式料等合せて、百円乃至百五十円である。常陸の某銅山では、坑道稍広きに過ぎて、非常に危険な場所がある、が然しその附近は所謂ポケット（鉱石の溜り）で夥しく銅を産出する。此に於てか会社では、支柱夫の傷害者月二三名を換算して、敢て作業せしめたと云う話を聞いた事がある。一人死して百円乃至百五十円の金で済むならば、莫大の鉱物を産出する所では、月二三人の人を殺す位は何でもない事であろう。

然し、一人の芸妓を引かすに数万円を惜しとせず、一疋のブルドッグを購うに数百金を投ずる世に、労働者の生命の如何に安価に見積られたる事よ。

三十六年の災害調査表には次の如き報告文が掲げられてある。広島県の煙草工場にあった事で、職工の名を幸一郎と云う。

右幸一郎は同工場にて就業中、自分着衣の裾を回転輪機の真棒に捲き込まれ、之れを外すの暇なかりしものか、遂に着衣の下部過半を捲き込まれて、身体共に数十回々転し、其都度、煉瓦畳みの地磐に頸部及四肢を打ちたる為め、遂に死に到りたるなり。

此の診断書には

頸部及四肢を打ちたる為め、後頭骨左方を打砕せられ、脳液を噴出し、右平時関節折れしとある。

資本家から見たら塵埃のように見える労働者でも、回転輪機に巻き込まれて、数十回煉瓦畳みに頭を打つければ、矢張り死ぬる人間である。而して此の救助金七十五円と記されていた。

某紡織工場に於ける女工は、作業中俯向きたる刹那、頭髪蓬の如く乱れ居りし為め、帯皮に捲き込まれて回転し、朋輩が之れを発見して機を止めた時には、已に頭蓋骨挫砕し、胸骨を圧迫されて死んで居た。而して此の弔慰金は二十五円であった。

汽関破裂に依って起る災害の原因を見ると汽関据付け後、蒸汽の漏出を恐れて安全弁を締切りたる為め、気圧上騰して破裂したるもの及び、長らく機関内部の障除を怠りたる結果、内部にスケール厚く固着して、気圧計が正確に気圧を示さざりし等の原因に依る者が多かった。

蒸気機関に於ける安全弁は、気圧が定圧以上に昇った時、此の弁から漏出して危険を免るる唯一の救助機である。然るに無智にして貪慾なる工場主は、此の弁から漏るる蒸汽を惜んで締切らしたのである。汽関の破裂は当然の結果である。

後者も年数回、汽関内部を掃除すべき規定を、汽関運転中止に依りて蒙る僅少の損害を恐れて怠ったが為めに、破裂の運命を蒙ったのである。機関破裂に依って蒙る惨状は実に甚だしいものであるが、此表には少しも記されていなかった。兎も角も資本家が、自家の私利の為めに、平然として同類の生命を奪いつつある事は、此表に依っても明らかである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com